聖なる湖

TODO SHIZUKO

藤堂志津子

聖なる湖

一九九三年八月三〇日　第一刷

著　者　藤堂志津子（とうどうしずこ）

発行者　阿部達児

発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三　郵便番号一〇二
電話東京（〇三）三二六五局一二一一

印刷　理想社　付物印刷　凸版印刷

製本　大口製本

万一、落丁乱丁の場合は送料当方負担でお取替えいたします
小社営業部宛お送り下さい
定価はカバーに表示してあります

© Shizuko Tōdō 1993
ISBN 4-16-314180-4

Printed in Japan

目次

聖なる湖　5
琥珀（こはく）　33
もう一人のあなた　55
雪おんな　85
ラブ・ソング　115
乙女の祈り　143
少女像　175
第三者　201

装画　いたがき　しゅん

ＡＤ　番　洋樹

聖なる湖

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

聖なる湖

日帰りも可能なN市までの距離だった。
車で片道・三時間、とガイド・マップには記されているけれど、運転に自信のある高志(たかし)に言わせると「往復で四時間もみれば十分だ」。
けれど理美子(りみこ)は、その街に一泊したかった。
かつて夫であった秋村が住んでいるという街の、空気の匂いや感触を肌で確かめてみたい。
そのためには、車であわただしく街並みを通りすぎるのではなく、ゆっくりとした時間が必要だった。
秋村の消息を知ったのは半年前である。
偶然に路上で出会った彼の昔の友人から聞かされた。
以来、理美子はその街に行ってみたいという思いを少しずつつのらせてきた。
高志にはくわしい事情は説明していなかった。あの街に興味があるの、短く、さらりとそうつ

ぶやいただけで高志は納得した。こうした言い方は理美子のくせだった。

一泊することについて、理美子はいつになく頑固なこだわりを示し、日帰りを主張しつづけていた高志もついに折れた。

「わかったよ。じゃあホテルの予約は俺が取っておく。例によってシングルふたつだろう？　ダブルじゃなくて」

さらに高志は不満げにつけたした。

「いまだに俺の運転の腕を信じてないなんて、意外だったなあ」

「そうじゃないわ。あなたの疲れが心配なの。四時間も運転させたうえに、多分、帰りは真夜中。夜の運転は目に負担がかかるし、それに車があると、あなたは夕食に一杯のワインも飲めないでしょ」

理美子も免許証は持っている。

しかし一緒のとき、高志はけっして自分の手からハンドルをはなそうとはしなかった。車に乗っている場合だけは、主導権は自分が握っていると、目に見えるかたちで確認したいのかもしれない。

高志は二十九歳、理美子より八歳下だった。

といっても理美子の言動には齢上を意識したそぶりはなく、むしろ、そういう態度はできるだけひかえていた。高志のプライドを傷つけまいとした。

反対に、高志は何かにつけて我を張り、決定をくだしたがった。そして、そんな自分を理美子がどう思っているのか、ときたま探ってくる。

「俺って、わがままだよな。そう思わない？」

理美子はこともなげに言い返す。

「そうね、わがままね」

だが表面上は自分の好き放題にふるまっていても、八歳下ということへの引っかかりが彼の心の底にひそんでいるのを、理美子はうすうす感じていた。

だから一年前に彼からそれとなく「つきあいはじめた二十四の女性がいる」とほのめかされたときも、冷静に受けとめた。

ふたりのかかわりは五年になる。姉弟のようだった最初の頃をふくめて、この歳月は恋愛感情よりも友情に近いものに、ふたたび逆もどりしはじめていた。

また理美子はことあるごとに「当分は再婚は考えられない」と言ってきたし、その気持はいまも変わらなかった。

恋愛関係になってまもなくの頃、高志は二六時中まとわりつきたがり、一日に何回となく電話をかけてきた。彼が社会人となった秋のことで、仕事に支障が生じるのではないか、と理美子が気をもむくらい、高志はひんぱんに職場を抜けだしては連絡してくる。理美子の側にしても、会社の同僚や後輩たちの手前があった。

頃合いを見はからって、理美子はこちらの姿勢を伝えた。極力おだやかな口調を心がけた。

「わかってもらいたいのだけれど、私は男のひとと一週間もびっしりとすごしたいとは思わないタイプの女なの。仕事で疲れたときは、ひとりでいるほうが安らぐ場合もあるし……誤解しないでね。これが私の正直な気持なの。相手があなただからではなく、だれに対しても」

しかし、それからしばらく高志からの電話はとだえた。予想していた通り、彼は遠まわしの拒否と考えたようだ。

ふた月後にもどってきた彼を、理美子は笑顔で迎えた。いっさいたずねなかった。

はなれていたあいだ、高志は彼なりに理美子の言葉を理解しようとつとめていたらしい。

ただ、その結論は、たいがいの男たちがたどりつく月並みさで、むしろ理美子をくつろがせた。

「要するに、きみは変わったひとなんだ。少くとも世間一般の女性たちとは違っている。だって好きな相手とできるだけ会っていたい、そばにいたいと思うのが普通だろ？　特に女のひとはその気持が強い。会社の女の子たちにもきいてみたけれど」

他人の心を、あれこれと理屈をこねて分析したり詮索しない、その月並みさが、理美子は好ましかった。

月並みさの中にひそむバランス感覚や、いわゆる常識的な発想は、かかわっていて安心できた。

そのバランス感覚が、再婚を望まない八歳上の理美子のかたくなさを、どうにかして打ち破ろうと意気ごむ無謀さをすてさせ、「つきあいはじめた二十四の女性」に結びつく。

けれど彼の常識的な発想は、二十四歳の彼女と交際しだしたのだから、理美子とは別れるという方向には働かなかった。いっぺんも、それらしきことは口にしない。もちろん、二十四の相手

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

には、理美子との関係はかくしているという。
そうした高志を「ずるいのね」とからかう資格は、理美子にはなかった。
ふたりの女を同時に自分のもとにとどめておこうとする彼をエゴイスト、身勝手な人間と言うなら、理美子にもそれは当てはまる。
再婚の意志もなく高志と五年もかかわり、しかも彼に新しい恋人ができたと知りながらも、その彼女が自分の存在に勘づいたなら、どれだけショックを受けるかがわかっていながら、理美子は自分から別れを告げようとは、まったく考えなかった。
高志の出方を待っている。最終的な判断は彼にまかせ、理美子はフラれる立場だけを、すばやく選び取った。
そして、高志と彼女の結婚を予感する一方では、そうなってからも彼が自分との関係を清算するつもりがないのなら、それはそれでかまわないと、気持をあえてあいまいにさせていた。
再婚するつもりのない理美子にとって、既婚の男性のほうが、かえって気楽に、わずらわしさなしにつきあえた。

初夏の土曜日の早い午後、高志の運転するグレーの乗用車は、湖岸沿いの国道を走っていた。
森林にぐるりと囲まれた湖はそう大きくはなく、湖面をへだてた反対側を走る車体の色が識別できるぐらいだった。国道は湖岸を半周して、小さな温泉町へ入ってゆく。それまでのあいだ人家は一軒も見当らない。

陽ざしはまぶしかった。

高志はいちはやくダッシュボードからサングラスを取りだして強すぎる光線から目を守っている。モス・グリーンのシャツにあわせて、サングラスのレンズは暗緑色という、いつもながらこまかく計算されたセンスである。学生の頃から彼はおしゃれだった。自分の体型や雰囲気に似合う色やデザインを十分に心得ていて、そのパターンをくずさずに、ほどよく流行も取り入れて着こなしてしまう。

そんな彼が他人のファッションに無関心でいるはずもなく、しかし理美子はこれまでアドバイスめいたことは言われたことがない。

グレー系統か黒、理美子のクローゼットの品々はこのふたつでしめられていた。三十歳をすぎてから、これ以外の色彩はどうも心になじめなくなり、気分のおもむくままに選ぶ服は、結局はグレーか黒に落ち着いてしまうのだった。あとはアクセサリーやスカーフなどで多少のめりはりをつける。

理美子のそういう服装のかたよりを、高志はもはや変えさせるのは無理と考えているのか、そこそこ気に入っているのか、あらためてたずねたことはない。だが彼の無言はありがたかった。気にそまない華やかな色合いを身につけるのは苦痛になる。

きょうの理美子はコットン・ジャージィのシンプルなグレーのワンピースをまとい、同色の革のベルトをしめていた。ワンピースとセットになっているVネックのカーディガンも持ってきたのだが、陽ざしの強さはそれを必要としなかった。

車は湖沿いを走りつづけている。
助手席にいる理美子はより湖に近く、湖面から反射される光が、まともに目にとびこんでくる。湖の表面は銀箔をはりつけたように光っていた。周囲の森林にすきまなく守られた、こぢんまりとした湖は、自然の中の聖女のような清らかさと可憐さを思わせ、見る者の心をなごませる。
だが、この湖は自殺者を多くのみこんでいることでも有名だった。
しかも、いったん湖底に沈んだ者は、けっして浮かびあがってこないともいわれている。清澄な外観とは違って、その底はおびただしい藻がからみあい、死者をとらえてはなさないのだという。
だから湖水の中には成仏できない死者の霊がいくつも漂っていて、奇怪な現象を次々と起こす、とまことしやかに語られてもいた。
実際、理美子の知りあいのテレビ・ディレクターも、この湖の不思議な噂を取材したときに、心中した男女の霊に取り憑かれたとしかいいようのない体験を、数名のスタッフとともに共有し、その呪縛は数カ月間にわたったらしい。
そのほかにも理美子の職場にも、夜、この湖のそばを車で通りかかった者が薄気味の悪い光景を目撃したとか、高志の友人にも同様の恐怖におそわれた複数の男女がいるとか、そのたぐいの話は身近にいくつもあった。
理美子はそういったことをうのみにはしなかったが、さりとて、あたまから否定する気にもなれない。体験者のほとんどが、ごく普通のノーマルな感覚の持ち主で、妄想癖とは無縁のところ

にいた。
ただ、この清純なイメージをたたえている湖が、その底に無数の死体、それも白骨化したそれをひそませていると想像するとき、不気味さとは別の感情が胸にひろがってくる。
それはそのまま人間世界を暗示しているようで、理美子はつい自分と秋村のかつての関係を引き寄せてしまうのだった。

高志が自信たっぷりに豪語していたように、目的のN市には二時間弱で着いた。
陽ざしはやや勢いを失っていたが、夕暮れという時間帯ではない。
ホテルの駐車場に車を入れ、フロントでそれぞれの部屋の鍵を受け取ったところで、高志は気落ちした口調で言った。
「これからどうする？　なんだかパッとしない街で、見るところなんてなさそうじゃないか。やっぱり日帰りにするのが正解だと思うな」
そしてすかさずフロント係の男性にたずねる。
「観光名所と言われているのはどのへんにありますか」
「さあ……」
相手は困惑をかくさずに苦笑した。
「観光バスも通りすぎてゆくような街でして……しいてご案内するとしましたなら、ここから一時間ばかり先に、ひなびた温泉町がございますが」

温泉めぐりへの興味など高志にはない。
「そうか……いや、どうもありがとう」
愛想のよい笑顔でそう言う高志を見ながら、理美子は、いっそう高志が不機嫌になったのを感じた。
彼は自分にも腹を立てているに違いなかった。
高志が予約したこのホテルは、ホテルと称するのがおこがましいような貧弱さで、コーヒー・ショップもレストランもバーもない。いや以前はあったらしいのだが、採算があわなくて閉鎖してしまったようだ。地方の小さな街ではよくあることで、理美子は会社の出張などで地方まわりをするたびに似たような経験をしていた。
けれど今回の高志は彼らしからぬうかつさで、ホテルを選択してしまった。どういうルートでここに決めたのか、理美子も珍しい彼の失敗の原因をききたかったが、非難しているように思われる危険もある。それでなくても彼はこういうホテルに理美子をつれてきた自分に苛立ち、神経をぴりぴりさせていた。
「とにかくお部屋に行きましょう。看板に偽りありというのは、よくあることよ。それにたったひと晩でしょう」
高志は強情を張った。それは、いかに彼のプライドが傷ついているかを端的に物語っていた。
「まだキャンセルできる。ほかのホテルを当ってみて、どこも駄目なら引き返そう。だいたい一泊するような距離じゃないんだから」

すぐにもホテルからとびだしてゆきそうな彼の剣幕を持てあましながら、理美子はめったに口にしない言葉をささやいた。めったに使わないだけに、最後の切り札になる。

「あなたとひと晩一緒にいるだけで私はいいの。場所は二の次よ」

言いながら気恥かしさに身をよじりたくなったが、案の定、高志の表情はたちまちになごんできた。

「きみがいいのなら、俺はかまわないけれど……」

さらに理美子はたたみかける。

「まるまる二十四時間そばにいるなんて、かれこれ一年ぶりでしょ。それだけで私はうれしいわ」

まるで第三者のせいでひと晩をともにできなかったようなうらみっぽいニュアンスをこめながら、現実にはそれを拒んでいたのは理美子だった。自分の住むマンションの部屋に高志を泊らせたことは、この五年間でかぞえるぐらいしかない。理由は、うっとうしい、のひと言であり、ひとり寝の気楽さに馴れすぎてしまってもいた。

くずれかけていたプライドをくすぐる台詞(せりふ)に、高志は気持を立て直し、余裕に満ちた紳士的な態度に変わった。

「俺はどこに泊ろうと平気だけど、なんか、きみに失礼なような気がしたんだ。やっぱり、ほら、そのひとのイメージってあるだろう?」

「ありがとう。そういう気づかいだけで私は大満足よ」

芝居がかったほほえみを浮かべて彼を見返す理美子の心に、一瞬、鋭いきしみがよぎっていっ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com